

るに、信濃先立す。利常卿御路次口まで出させられ、敷居を拂うて御挨拶あり。各入りける時、信濃敷居を越きて入りたりけり。利常卿甚だ御感心被成けり。其後江戸にて、將軍秀忠公の御茶湯に、利常卿御上り被成ける時、即ち右の首尾に成されたりしが、秀忠公御覽ありて、扱も肥前は珍敷事をせられたり。尤もなる事と、大方ならず御感ありけり。此の事を利常卿へ尋ねられし仁ありければ、神谷信濃と云ふ家來に習ひたりと仰せられしとぞ。

○越後屋敷

此の地は、新丸の東隅にて、尾坂門の入口なり。そのかみ富田越後守重政の舊第なりし事、前編の古圖にて著明也。網紀卿國務の初め、藩侯江戸在府中は、執政の國老此の舊第に出席して國務を取扱ふ事と成り、舊名を存して越後屋敷と稱したりしかど、廢藩後取毀ちたりと云ふ。金城深秘錄に、越後屋敷は、富田越後守居住之處故、今以て其號を名とす。或は越後丸共云ふ。と記載すれど、越後丸の名を稱する事不詳。三州志來因概覽附錄に云ふ。富田越後守重政へ此の第地を賜はりたる年月は知れず。重政の子越後重康

まで此の第に住す。重康寛永二十年八月病死す。其の子越後重次、寛永二十一年五月小松に到り微妙公に奉仕し、小松にて病死す。其の養子越後重持相續す。公薨後萬治二年金澤へ歸り、十間町の第地を賜はり、爰に住す。菅家見聞集を考ふるに、萬治二年關東より目附衆金澤へ來る時、前田美濃利明君の第をあけて居所となす。美濃君第は、今の越後第なり。とあれば、正保の頃より越後舊第に美濃君居られ、萬治二年利治君の嗣子と成り江戸へ到る後、官第と成り、夫れより三十年許ありて、元祿十年より公在府中執政の輩此の第へ出席の事となる。寶曆七年正月八日此の第火災す。此の時まで越後守刀術稽古等の定書、壁上に煤け残りたりたりと云ふ。有澤武貞の圖草保十九年の斷書にも、富田越後守重政第、今以て其號を指す。今迎も其時の古家作のしつらひ直したるものなりとあり。一雜記に、越後守の志節武勇衆に越えたるを以て、恒に比類なく思召され、金城大手の城戸際に居第を賜はる。これ即ち越後第なりと云ふ。と見ゆ。一書に、寶曆六年正月八日夜此の第火災すといふは非也。變異記に、寶曆七丑正月八日夜五つ

時、御城内越後屋敷長屋出火焼失、本屋無難。門番足輕二人範舍被仰付。と見ゆ、蘭山私記に、寶曆七年丁丑正月八日夜五つ半時、越後屋敷より出火、三十間長屋御門共不殘焼失、御門扉迄相殘。御添印所より燃出之由、津田玄蕃一番に駐付け、人數殊の外相働く。山崎縫殿御添印役所へ罷出、怪我致し、其場に而落命。前田左膳も其場にて塞り、家來之肩に懸り罷歸。御添印所留帳悉焼失之由。とあり。されば變異記に、長屋より出火、本屋無難。と載せたるも亦非也。又三州志來因概覽の自註に、古老の談に、寶曆の出火後、備後屋敷に残る長屋を越後第へ移し、指しかゝり入用の役所は此の内に出來の處、再び同九年の大火に焼失すと云ふ。備後屋敷は、今の前田余所次郎居室の向ひ學校中と云ふ。備後殿は松雲公の二男、初め富五郎殿と稱す。

○富田越後守重政傳

富田氏は、平氏にて梶原の末葉たり。其の祖治部左衛門景政、尾州荒子以來利家卿に奉仕し、采地五千石を賜ふ。男子なく、重政を以て婿養子とす。重政初め山崎與六郎と稱し、後六左衛門又大炊と改稱す。武勇拔群屢、武功を顯し、

家を起して世祿一萬三千六百餘石に至る。慶長元年九月叙爵し、下野守を拜任すといへども、同六年三月徳川將軍の御弟忠吉君下野守に任じ給ふを以て、越後守と成る。故に世人名人越後と稱す。元和の初め致仕し、休料二千石賜はり、寛永二年四月十九日卒す。享年六十二歳。武藝小傳に云ふ。富田越後守者。始號山崎六左衛門。從富田治部左衛門。得中條流傳脈。由台徳大君台命。言上刺撃之事。顯名於四海云々。武家耳底記に云ふ。富田越後は中條流劍術の名人なり。或時利常卿茶室にて、汝が家に無刀取の術有りと聞けり。是を取りて見よとて、眞劍を抜きて手に持ち居給ふ。越後謹んで承り、家の秘密の處、御後の戸の透より人々覗き居たり。之を制し給はば、御意に順ひ候はんと云ふ。利常卿人の覗くかと後、を見かへり給ふ處をつと寄りて御拳をしかと捕へて、我が家の無刀取と申すは如此と申す。殊に御感ありしと也。又越後罷を家人に刺らせけるに、隠の下に及ぶ時家人思ふやう、越後殿は天下の名人と聞く。如何程上手に而も、かやうの時に咽の下を一刺刀やらば云はせまじきと、風と心に浮びけるに、越後汝はすさまじき